

## 学校行事が生徒の人格形成に及ぼす影響について (2) 校外学習

筑波大学附属駒場中高等学校 生徒部

岡崎 勝博・辻 弘・曾根 睦子・遠藤 正之  
小澤 治夫・鹽谷 健・小澤富士夫・八宮 孝夫

# 学校行事が生徒の人格形成に及ぼす影響について

## (2) 校外学習

筑波大学附属駒場中高等学校 生徒部

岡崎 勝博・辻 弘・曾根 睦子・遠藤 正之  
小澤 治夫・鹽谷 健・小澤富士夫・八宮 孝夫

### 第1章 調査の意図と対象者

#### 1, はじめに

前回の調査（「学校行事が生徒の人格形成に及ぼす影響について（1）文化祭」）において、文化祭が生徒各自の人格の形成に多大な影響を及ぼしており、影響が「大いにあった」「少しはある」と答えた生徒は各学年とも70%以上存在し、高校3年生にいたっては約83%の生徒が「影響があった」としている。次に、人格への影響の内容についてみると、各学年とも「忍耐力」「責任感」を第一にあげており、文化祭での共同作業がこれらの能力を必要としていることが理解された。また、文化祭での友人関係については、普段の友人関係よりも「文化祭は、友人をよく知るよい機会」であると感じており、その数は各学年75～85%になっていた。そして高校3年生では91%もの生徒が友人をよく知る機会であるとしていた。

前調査より、文化祭が生徒の人格の形成（自分づくり）や友人関係を構築するうえで非常に大きな影響を及ぼしていることが明らかにされ、そしてこの関係を成立させるものとして文化祭の質の高さや学校文化が重要な働きをしていることが考えられた。

このように、学校行事が担っている人格形成作用を明らかにしていくことは、学校行事が持っている教育的価値を見直していく作業であり、教科指導とともに学校における教育機能として欠くことのできない教育活動であることを確認することになる。

#### 2, 本研究の目的

本校では、「駒場水田」を利用した勤労体験学習、校外学習、音楽祭、体育祭、文化祭、ロードレースなど、年間を通じてさまざまな学校行事が位置づけられており、またその取り組みは中・高6か年教育の中でも位置づけられている。

多くの生徒は教科の学習による「観」の形成とともに学校行事に参加する中で人格の形成（自分づくり）を行っている。しかしこれらの学校行事が生徒の自分づくりに影響を及ぼしていることは理解されるのであるが、それがどのような過程で、またどのように影響を及ぼしているのか

については十分に明らかにされていない。そこで本研究では、校外学習に焦点を当て、学校行事が生徒の人格の形成に及ぼしている影響を明らかにすることを目的とした。

### 3, 調査方法, 時期

なお、本調査の実施は、1996年（平成8年）7月中旬に行われた。

### 4, 調査対象者

調査対象者は中学生男子367名、高校生男子317名、計684名を対象とした。

中学1年生	123名	高校1年生	160名
中学2年生	123名	高校2年生	157名
中学3年生	121名		

## 第2章 校外学習の特徴と対象者の特性

### (1) 校外学習の特徴

高校3年生を除く各学年は、毎年5月下旬に校外学習を行っている。各学年とも旅行委員会が編成される。委員は校外学習の企画内容について一定の自主性をもち、その範囲内での企画を計画し、学年全体の生徒を動かしている。また、生活行動についても自主的に行動規則をもうけ自主運営を行う形態をとっている。

表1『各学年の校外学習の内容』

学年	方面	主な活動内容	ねらい
中1	群馬県	登山、スポーツ大会 飯盒炊飯	新入生の交流。登山やスポーツ大会において班行動することにより集団行動を身につける。
中2	東京周辺	地域研究	班別に課題を設定し、調査研究を行う。調査方法、報告書のまとめ方を学習する。
中3	東北	地域研究	東北地方の文化にふれる。 班別に課題を設定し、調査研究を行う。
高1	長野県 菅平	登山、スポーツ大会	新入生の交流。登山やスポーツ大会において班行動することにより集団行動を身につける。
高2	関西	地域研究	関西地方の文化にふれる。 班別に課題を設定し、調査研究を行う。

## (2) 対象者の分類

今回の調査では、校外学習についての生徒の意見や考え方、また校外学習による人格形成への影響を検討するために生徒の類型化を行った。

類型化は、校外学習への参加意欲を横軸にとり、次に生徒の役割を縦軸にとって類型化を試みた。この関係を分類してみると次のようになる。

横軸：「あなたは、校外学習にどのように参加しましたか。」

- [1] 積極的に参加していた [2] まあまあ積極的に参加していた [3] ふつう  
[4] どちらかというと消極的な参加 [5] まったく消極的な参加

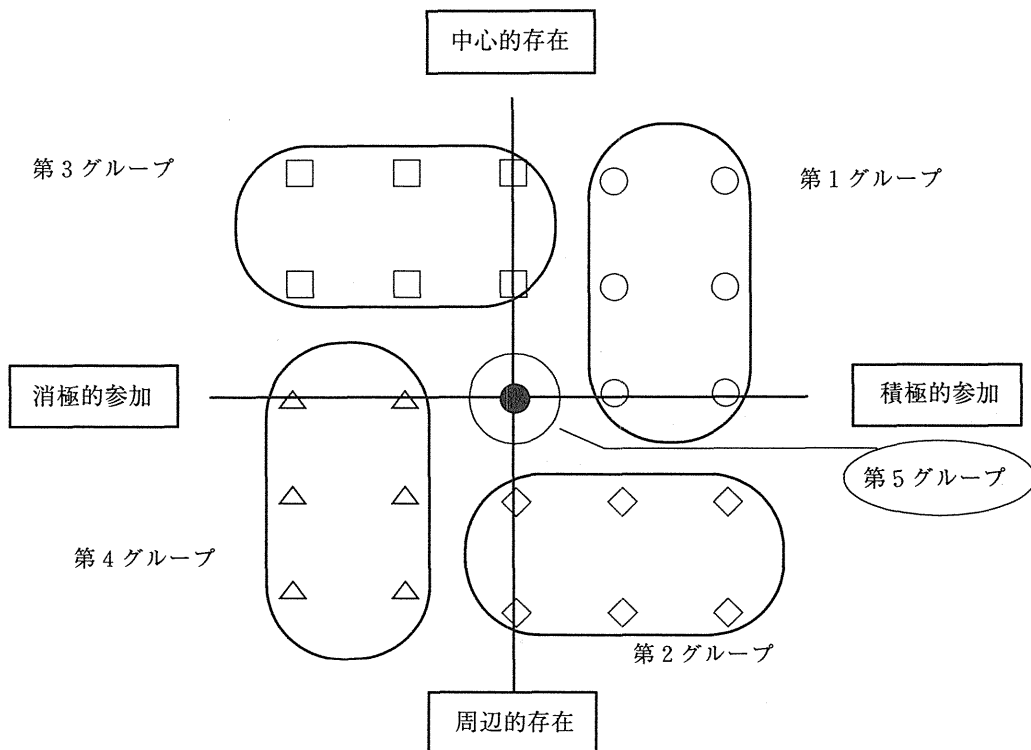
縦軸：「あなたは、クラスの活動においてどのような役割をはたしていましたか。」

- [1] 中心的存在 [2] 一緒に企画を進めている存在 [3] 与えられた仕事  
はこなす存在 [4] どちらかというと仕事から逃げ回っている存在  
[5] ほとんど企画や仕事にかかわっていない存在

表2.『対象者の分類』

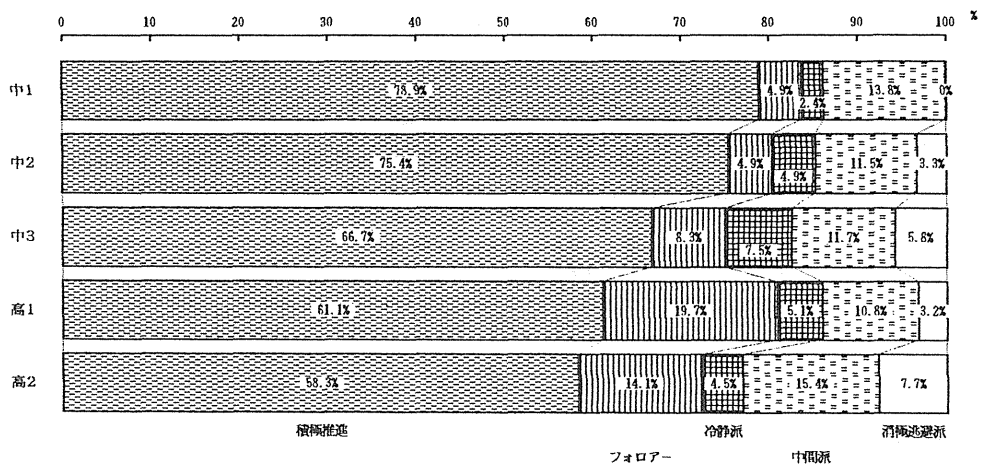
	横軸	縦軸
第1グループ ＜積極推進派＞	「積極的に参加している」 「まあまあ積極的に参加している」	「中心的存在」 「一緒に企画を進めている存在」 「与えられた仕事はこなす存在」
第2グループ ＜フォロアー＞	「積極的に参加している」 「まあまあ積極的に参加している」 「ふつう」	「仕事から逃げ回っている存在」 「ほとんど企画や仕事にかかわっていない存在」
第3グループ ＜冷静派＞	「ふつう」 「どちらかというと消極的な参加」 「まったく消極的な参加」	「中心的存在」 「一緒に企画を進めている存在」
第4グループ ＜消極逃避派＞	「どちらかというと消極的な参加」 「まったく消極的な参加」	「与えられた仕事はこなす存在」 「仕事から逃げ回っている存在」 「ほとんど企画や仕事にかかわっていない存在」
第5グループ ＜中間派＞	「ふつう」	「与えられた仕事はこなす存在」

図1 校外学習への参加形態の類型化



(3) 学年ごとの類型化

図2. 学年別参加類型化



全体的にみると、積極推進派が学年進行とともに減少し、フォロアーの数が増加している。中学1年では積極推進派が78.9%になり、新入生の意気込みが感じられる。その後積極推進派は学年進行とともに減少するが、高校2年生でも58.3%の生徒が積極的に校外学習に参加していることが示されている。

高校1年生では他の学年と比較してフォロアーの割合が増えている。これは学年の特徴か、もしくは高校からの新入生が、この行事に対して「様子を眺めている」態度の表れとも考えられる。

### 第3章 積極派の参加理由と消極派の逃避理由

#### (1) 積極派の参加理由

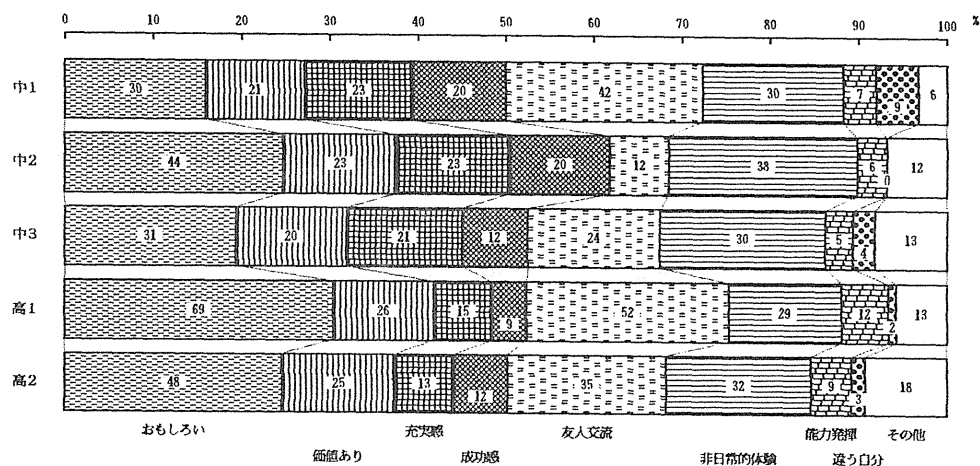
##### ①積極的な参加理由

校外学習に「積極的に参加していた」「まあまあ積極的に参加していた」とする生徒は、どのような理由で参加していたのかを質問した。

選択肢は、「おもしろいから」「価値があると思うから」「計画を立てたり実行していくときの喜びや充実感が得られるから」「うまくいったときの成功感が得られるから」「友人との交流が楽しいから」「普段の学校生活とは違う非日常的な体験ができるから」「自分の能力が発揮できるから」「校外学習では普段と違う自分が出せるから」「その他」となっており、該当するもの2つを選択することにした。

各学年とも「おもしろいから」「友人との交流が楽しいから」「普段の学校生活とは違う非日常的な体験ができるから」をあげる生徒が多い。中学1年と高校1年は新入生ということで特に「友人との交流」をあげる生徒が多くなっている。反対に、中学2年生では「友人との交流」をあげる生徒が少なくなっているのは、中学2年の校外学習が宿泊を伴わない形式で行われるところからくるものと考えられる。

図. 3 校外学習に積極的に参加する理由



## (2) 消極的な参加の理由

校外学習への参加の様子を尋ねた質問で、「どちらかというと消極的な参加」「まったく消極的な参加」を選択した者の理由を質問した。選択肢は表3の項目に示されており、その中から2つ選択させた。

表3. 消極的参加の理由 \*中全一中学生全体, 高全一高校生全体

項 目	中1	中2	中3	中全	高1	高2	高全
内容がつまらない	1	1	4	6	5	5	10
思い通りのことができない		3	6	9	1	4	5
価値がないと思うから		2	3	5	2	3	5
なんとなくやる気がしない			4	4	6	7	13
疲れるだけだから	1		1	2	1	1	2
失敗ばかりしてきたから			1	1		2	2
友人との交流がわずらわしい						1	1
一緒に楽しめる仲間がいない		1		1		1	1
塾での勉強が遅れるから			1	1	1		1
その他	1	4	8	13	5	8	13
回答数	3	11	28	42	21	32	53
回答者数(人数)	3	10	17	30	14	18	32

全体的に数は少なく、中学生で全体の8.2%、高校生で全体の6.7%の生徒が該当している。中学では、「その他」を選択するものを除くと「思い通りのことができない」と「内容がつまらない」という項目を合わせて回答数の52%になり、消極的参加の理由が内容にかかわってのことであることがわかる。高校では、「その他」を選択するものを除くと「思い通りのことができない」と「内容がつまらない」という項目を合すると回答数の38%になり、一方「何となくやる気がしない」と「疲れるだけだから」を合わせる38%になり、消極的参加の理由が二極に分かれていることがわかる。

最後に質問項目に関して言うと、各学年とも「その他」を選択する生徒が多いことより、今回の質問項目では消極的な参加者の参加理由を十分に拾える調査にはなっていないことを指摘しておきたい。

## 第4章 校外学習が生徒の人格形成に及ぼす影響について

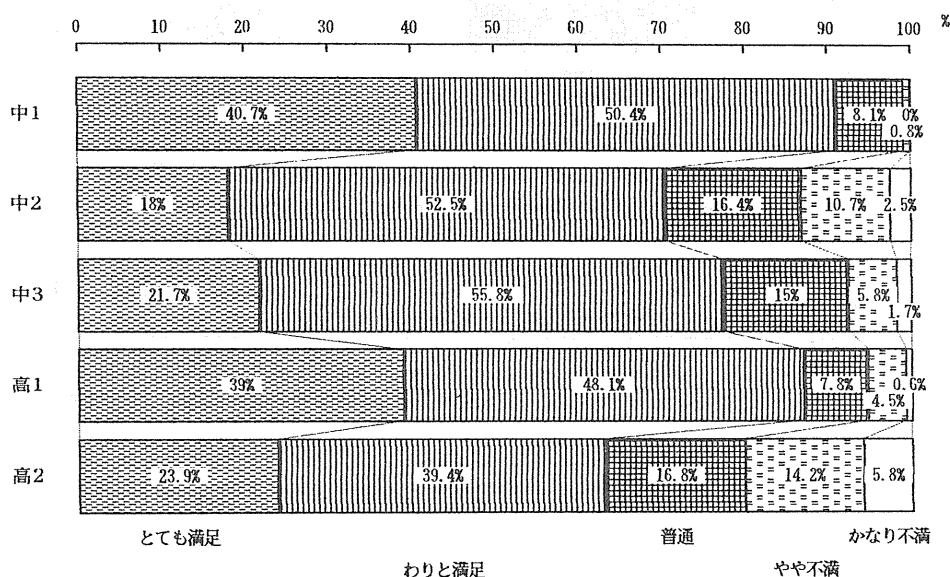
### (1) 校外学習の評価

校外学習が生徒の人格形成に及ぼす影響を調べるに当たり、生徒が校外指導をどのようにとらえているのかを調査した。

### ①.校外学習の満足度

生徒が校外学習をどのように評価しているのかを満足度により調べてみた。これによると「とても満足」と「わりと満足」を合わせると各学年とも6割以上の生徒が満足していると回答している。特に中学1年と高校1年では約9割の生徒が満足と答えている。

図4. 校外学習への満足度



### ②.満足度の理由

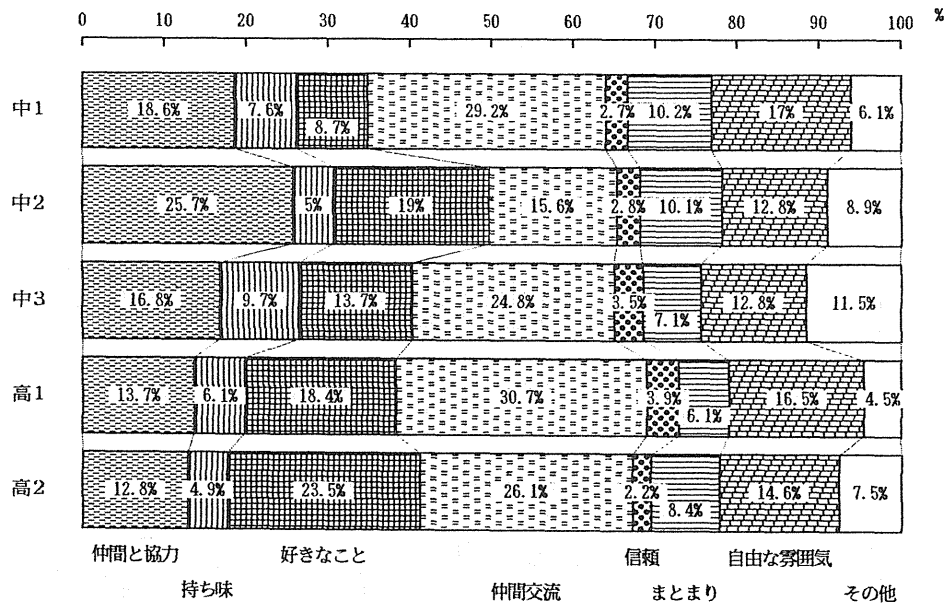
図5では、「とても満足した」「わりと満足した」を選択した生徒の理由が示されている。選択肢は、「仲間と協力して仕事をする事ができた」「自分の持ち味が出せたこと」「自分の好きなことができたこと」「仲間との交流が深まったこと」「仲間から信頼を得られたと思うこと」「クラスや班のまとまりを感じる事ができたこと」「学校の自由な雰囲気が感じ取れたこと」「その他」からなり、該当するものすべてを選択させた。

各学年とも「仲間との交流が深まったこと」という項目を選択する生徒が多く、校外学習が仲間づくりに非常に有効に働いていることがわかる。特に中学1年と高校1年でこの傾向が高いことは、行事の主旨が生かされていることを示している。

また中学1年と高校1年で、「学校の自由な雰囲気が感じ取れたこと」を選択する生徒が多く、入学当初に本校のもついわゆる「自由闊達」の精神を感じ取っている様子が伺える。中学2年で「仲間との交流」が少ないのは、この学年の活動が宿泊を伴わず、東京周辺の調査研究が活動内容になっているからと考えられる。



図4. 満足度の理由



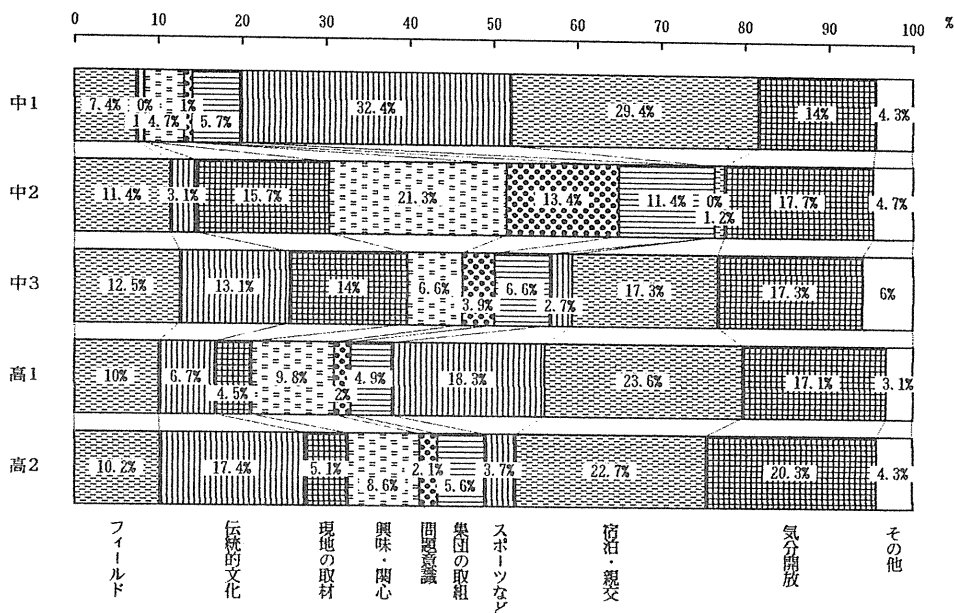
### ③.各学年の取り組みからみた満足内容

校外学習で「よかったな」「ためになったな」と思う項目を選択させることにより、各学年の取り組みに接近した形での満足度を調べた。回答は該当するものすべてを選択させた。

『図中の項目名』

- |  |         |
|--|---------|
| 1, フィールドワークの楽しさがわかった                     | フィールド   |
| 2, 実際に現地で遺跡や伝統的な文化にふれることができてよかった         | 伝統的文化   |
| 3, その地域の様々な人から話が聞けてよかった                  | 現地取材    |
| 4, 自分の興味・関心のあることが学習できてよかった               | 興味・関心   |
| 5, 自分で問題意識をもって、探究できたのがよかった               | 問題意識    |
| 6, みんなで話し合いながら、課題を深めたり広げたりすることができたのがよかった | 集団の取り組み |
| 7, みんなでスポーツ、登山、サイクリング、飯盒炊さんなどができたのがよかった  | スポーツなど  |
| 8, みんなで宿泊し、仲間と親しくなったのがよかった               | 宿泊・親交   |
| 9, 学校を離れ、気分が解放されたのがよかった                  | 気分解放    |
| 10, その他                                  | その他     |

図5. 各学年の取り組みからみた満足内容



これにより各学年の取組とそこでの生徒の満足度がよく反映されている。どの学年も「気分開放」を選ぶ生徒が多く、非日常性という校外学習の意味が評価されている。その他では、中学1年で「スポーツや飯盒炊さん」の活動や「宿泊による親交」が多くの生徒により選択されている。中学2年では、「自分の興味・関心」「問題意識」「現地での取材」など調査研究にかかわっての評価がなされている。中学3年と高校2年は同じような傾向を示しているが、「伝統的文化」と「現地取材」で逆転関係になっている。高校1年は、「スポーツなど」「宿泊・親交」が多く選択されている。

#### ④. グループ別にみた満足度

5グループと満足度の関係を見ると、積極推進派は「とても満足」と「わりと満足」を合わせると84%以上の生徒が満足していると答えている。

消極逃避派は、「どちらともいえない」を挟んで満足派と不満足派に分極している。これは消極逃避派が、「なんとなくやる気がしない」という理由で消極的参加を行っている者と、「内容がつまらないから」「自分の思い通りにできないから」という理由で消極的な参加になっているものとで構成されているからと考えられる。ただここでは、内容に不満な者が「不満」としているのか、それとも「やる気のない者」が「不満」としているのかは判別できない。

表5 5 類型と満足度

	とても満足	わりと満足	どちらとも	やや不満	かなり不満	人数
積極推進	153	224	39	27	8	451
フォロアー	16	39	14	6	0	75
冷静派	10	13	8	1	1	33
中間派	13	41	18	6	4	82
消極逃避派	2	9	7	6	2	26

## ⑤.不満足の理由

校外学習に対して「やや不満」「かなり不満」とした生徒が、どのような理由で選択したのかを質問している。

選択肢は、1 - 「自分の好きなことができなかった」、2 - 「自分の能力があまり発揮できなかった」、3 - 「仲間との関係がうまくいかなかった」、4 - 「信頼できる仲間が少なかった」、5 - 「クラスや班のみんながまとまらなかった」、6 - 「いやな仕事を押しつけられたから」、7 - 「準備に時間と労力がかかって疲れたら」、8 - 「最初からやりたくなかったから」、9 - 「その他」で、該当するものすべてを選択させた。

不満足の理由としては、中学2年以外は「自分の好きなことができなかった」を選択する生徒が多かった。中学2年では「クラスや班のみんながまとまらない」をあげる生徒が多くなっている。

なお、高2では「その他」をあげる生徒が多く、この選択肢では十分に対応し切れていないことを指摘しておく。

表7. 不満足とした者の理由

回答数

選択肢	中1	中2	中3	高1	高2
好きなことができなかった	3	3	5	6	19
能力があまり発揮できなかった	1	3	4	2	4
仲間との関係がうまくいかない		3	1	5	7
信頼できる仲間が少なかった			2		5
クラスや班のみんながまとまらない		7	4		6
いやな仕事を押しつけられた		2			3
時間と労力がかかり疲れた		2			3
最初からやりたくなかったから		1	1	3	4
その他	1	4	2	3	14
回 答 数	5	2	19	17	65
回 答 者 数 (人数)	5	15	10	14	31

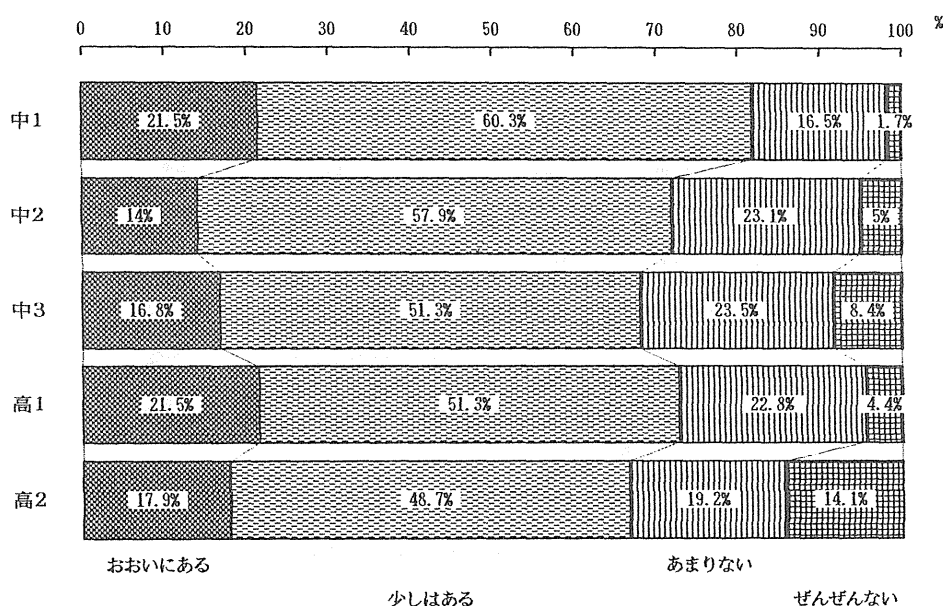
## (2) 校外学習と人格形成

### ① 校外学習が『自分づくり』に与える影響

多くの生徒は、校外学習に参加する中で様々なことを感じ取り、また教科では得られないことを学び取っている。

校外学習が自分の人格形成（自分づくり）とかかわっているととらえている生徒は多く、「校外学習に参加するなかで自分の人格形成のうえで役立ったことがありますか」という質問に対して、「おおいにある」「少しある」と答えた生徒はどの学年においても65%以上もしていることがわかった。

図6. 校外学習と人格の形成



### ② 人格形成の内容

次に校外学習が人格形成に影響していると答えた生徒について、それはどのような内容なのか質問した。ここでの選択肢は、1 - 「計画性」、2 - 「説得力」、3 - 「企画力」、4 - 「創造力」、5 - 「忍耐力」、6 - 「責任感」、7 - 「人をまとめていくこと」（図ではリーダーシップとした）、8 - 「やり抜く力」、9 - 「人の意見を聞くこと」（図では調整力とした）、10 - 「その他」で構成され、該当するものすべてをあげさせた。

中学1年では、「責任感」や「やり抜く力」をあげる生徒が多く、初めて顔を合わせた集団のなかで班別活動を計画して実行するために、これらの能力が必要とされたものと考えられる。中学2年では、調査活動に際しての事前の計画性や企画力が問われた結果が表れている。そしておそらく調査は各班で役割分担が行われて活動されたために「責任感」の項目でも高い値が示されている。また、他の学年と比較して「忍耐力」をあげる生徒が少ない。これは宿泊を伴わない活

動で、期間も短いことが影響していると考えられる。中学3年は、高校2年と活動内容が似ているので、人格に影響したとする内容に同じ傾向がみられる。高校1年は、活動内容が登山とスポーツ大会と決められているので「企画力」の項目を選ぶ生徒が少なくなっている。

### ③グループ別にみた人格への影響

グループ別にみていくと、積極推進派の79%の生徒が「おおいにある」「少しはある」と答えている。フォロアーでも、約65%（48人）の生徒が影響があるとしている。消極逃避派の数が少なく、影響があるとするものは約40%になっている。

図.7 人格への影響の内容

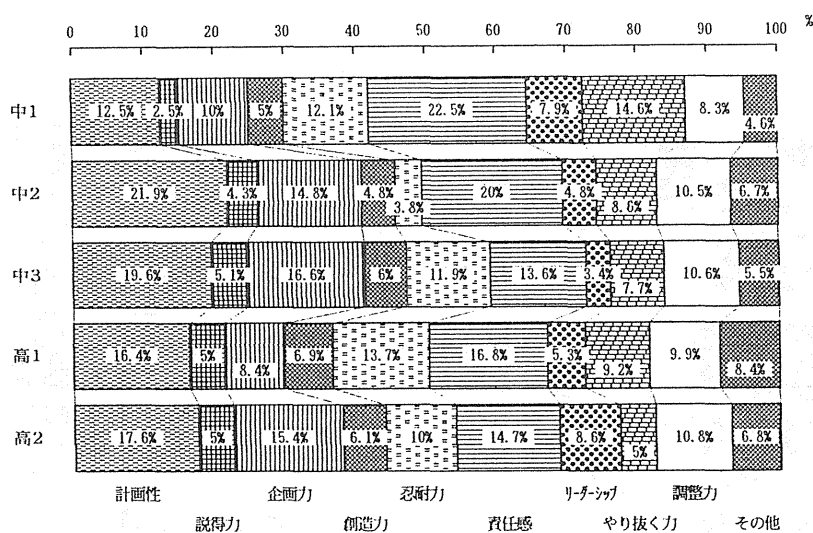
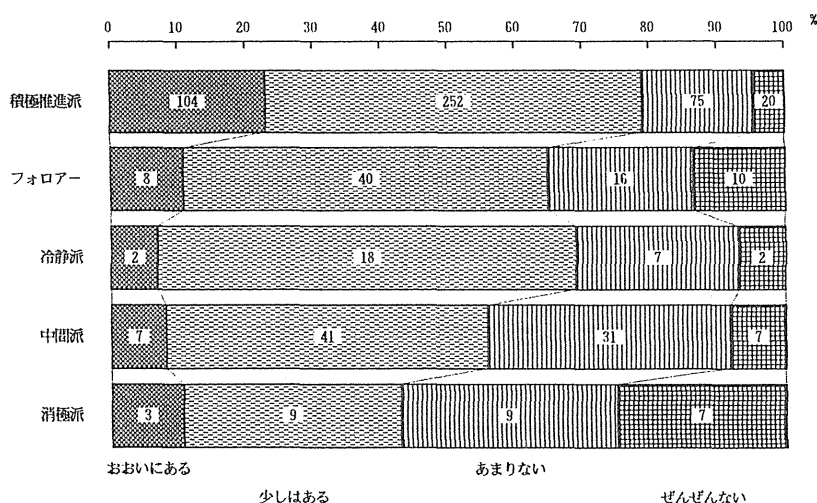


図. 8 グループ別にみた人格への影響

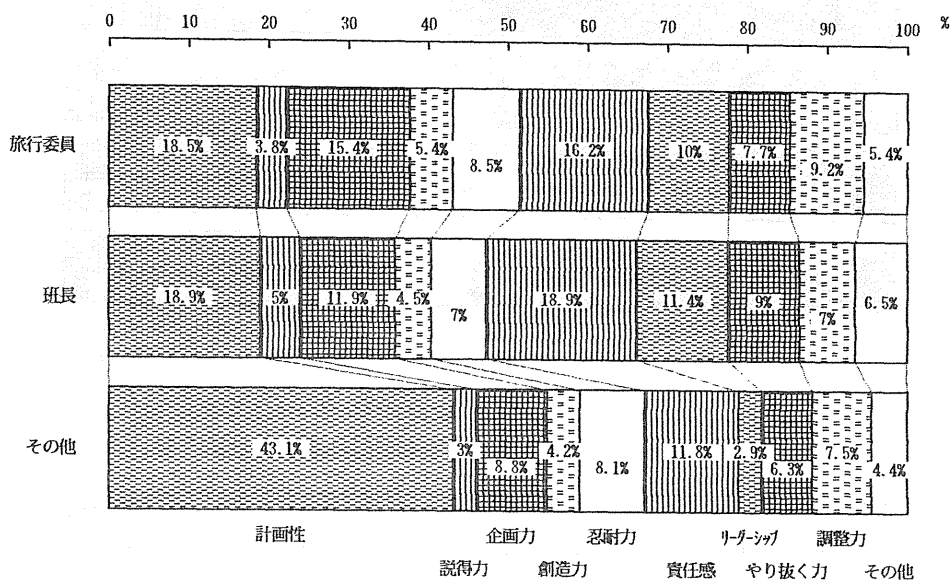


#### ④役割と人格内容

校外学習における役割が人格の形成にどのように作用しているのか質問した。役割は、フォーマルには各クラスで選出される2名の旅行委員と5～6人程度をまとめる班長とその他に分けられる。図9では、中学1年から高校2年までの各役割をまとめて人格内容との関係をみている。これによると、その他のグループは計画性をあげる生徒の割合が高くなっているが、これは他の能力項目を選択する生徒が少ないことより、相対的に「計画性」の比率が高くなっていると解釈した方がよい。

旅行委員・班長とその他を比べると、「企画力」「責任感」「リーダーシップ」において違いが表れており、役割が人格形成に影響を及ぼしているといえる。

図9. 役割と人格への影響



#### (4) 校外学習での友人との交流について

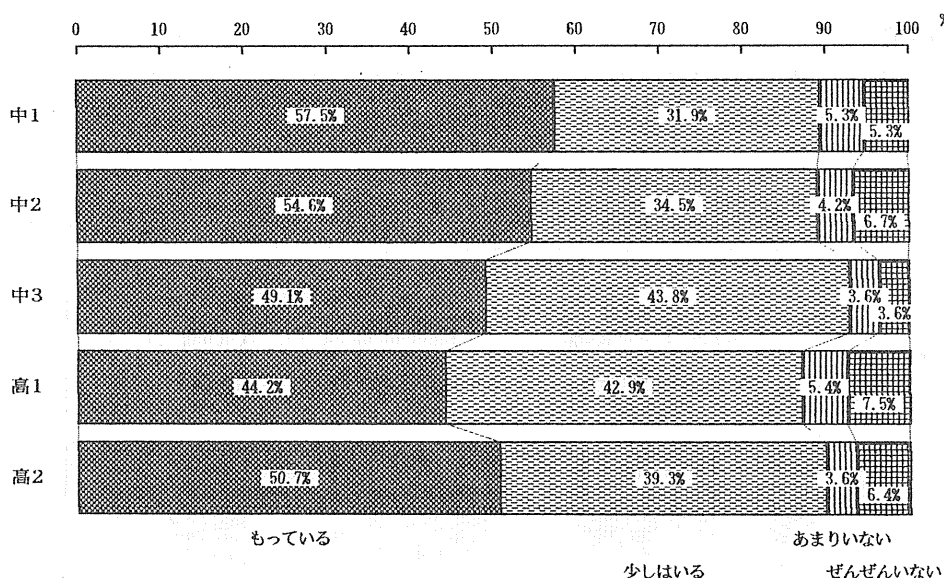
学校行事は、生徒の人格形成に影響を及ぼしているが、それが行事の内容によるのか、それとも行事に取り組む仲間集団によるものなのか区別することは困難である。ただ、行事に取り組むなかでの仲間集団からの影響は、人格形成の上で非常に大きな要因であると考えられるので、以下では行事における人間関係に焦点を当てて調査を行った。

##### ①普段の友人関係

まず、「普段から本音でつき合える友人をもっている」かどうかを尋ねた質問で「もっている」「少しはある」とする者は、各学年とも回答者数のおよそ85%になっている。

一方、「あまりいない」「ぜんぜんいない」とする生徒は、各学年とも10%程度存在している。これらの「いない」という回答を多いと判断するか、少ないと判断するかは意見が分かれるが、ただ質問項目で「少し」「あまり」という表現を用いたため、回答者の方でこれが友人の量を尋いているのか、それとも親密さの質を尋いているのか解釈の違いが表れていると考えられる。

図10. 普段から本音でつき合える友人



グループ別に「本音の友人」の有無をみると、グループ間でそれほど大きな特徴はないことがわかる。積極推進派においても「あまりいない」「ぜんぜんいない」とする者は、中学で約8%、高校で約7%存在し、他のグループと変わりはない。彼らの言う「本音の友人」とは何か、さらに明らかにすることが必要である。

表6. グループ別にみた本音の友人

人数

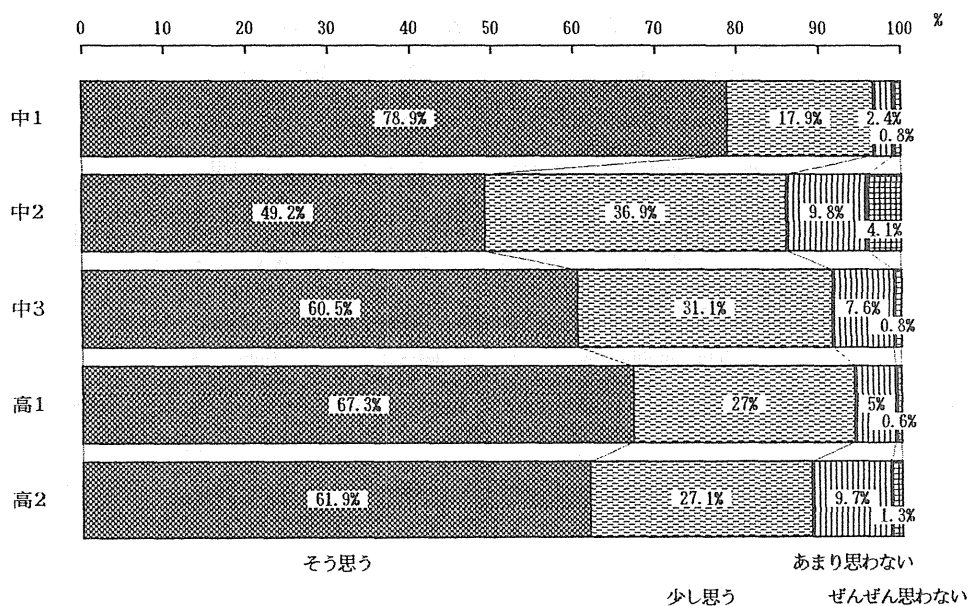
	中学				高校			
	いる	少しは	あまり	ぜんぜん	いる	少しは	あまり	ぜんぜん
積極推進	130	96	8	12	94	68	4	8
フォローア	10	13	2	3	19	23	3	7
冷静	8	6	1	1	9	3	0	1
中間	22	16	3	0	11	17	4	1
消極逃避	4	4	1	2	3	7	2	1

## ②校外学習での友人関係

次に、「校外学習は、友人をよく知るよい機会」かどうかを質問すると、「そう思う」「少し思う」とする生徒が非常に多く85%以上の値を示している。

学年を縦断的にみていくと、中学1年生では「そう思う」「少し思う」を合わせると97%もの生徒が友人をよく知るよい機会だととらえている。校外学習が友人関係を深めるよい機会になっていることが理解される。中学2年では、その率が低下しているが、その理由としては宿泊を伴わない内容が原因と考えられる。そして、宿泊をとまなう中学3年では、再び上昇している。そして高校では、新入生が入学する1年生で「友人をよく知れる機会」であるととらえる回答が増えて、2年生で若干減少している。

図11. 校外学習での友人関係





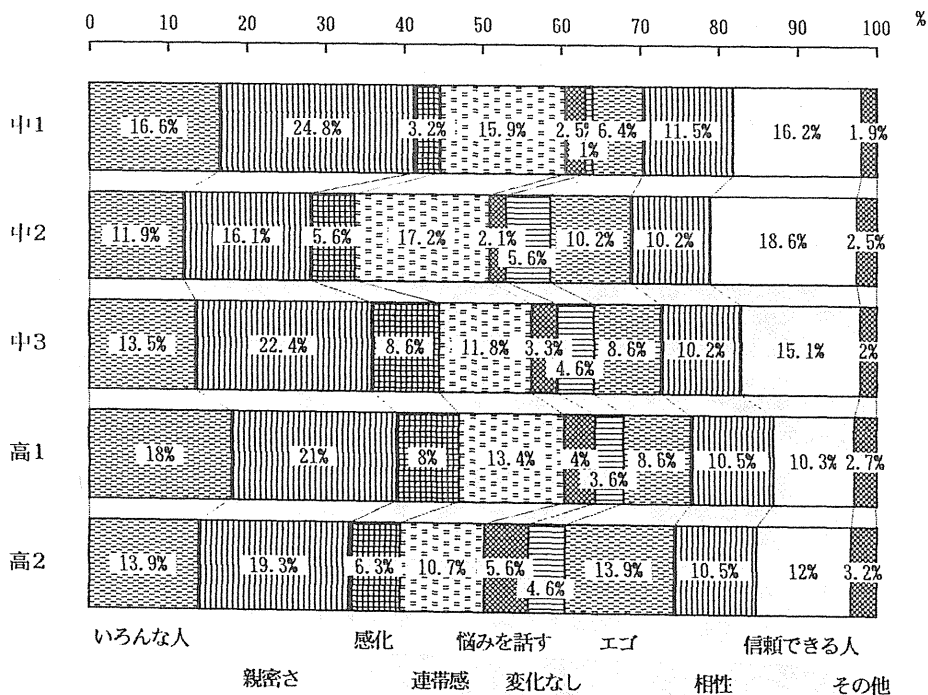
### ③校外学習での友人関係の内容

次に文化祭での友人との交流の内容について質問している。選択肢は以下の項目。

<図中の項目名>

- |                                 |       |
|---------------------------------|-------|
| 1 - 「いろんな人とつき合えるのがよい」           | いろんな人 |
| 2 - 「日常より親密につき合えるのがよい」          | 親密    |
| 3 - 「仲間での話し合いで感化されることが多い」       | 感化    |
| 4 - 「仲間との連帯感が得られるのがよい」          | 連帯感   |
| 5 - 「普段思っている意見や悩みを話すことができるのがよい」 | 悩みを話す |
| 6 - 「普段のつき合いとあまり変わらない」          | 変化なし  |
| 7 - 「人のエゴがよくわかる」                | エゴ    |
| 8 - 「自分と気が合う人と合わない人がよくわかる」      | 相性    |
| 9 - 「信頼できる人は誰だかよくわかる」           | 信頼    |
| 10 - 「その他」                      |       |
- \*これらの選択肢から該当するものすべてを選ばせた。

図12. 校外学習での友人関係について



各学年とも「いろんな人につき合えるのがよい」「日常より親密につき合えるのがよい」「信頼できる人は誰だかよくわかる」という項目を選ぶ生徒が多い。これらは学校行事のもっている教育機能を示しているのではないか。一つには日常の固定された人間関係を崩す作用、二つ目は日常の人間関係では得られない親密さが得られること、そして三つ目は集団活動を通じて「信頼できる人は誰だかよくわかる」という人の評価が行われていることであり、この他者評価は裏返せば自己評価にも繋がっている。これらの契機により「自分くずし」や「自分づくり」が行われていると考えられる。

中学1年と高校1年では、「いろんな人につき合えるのがよい」という項目が他の学年と比較して多くなっており、入学当初の校外学習が友人づくりに有効に働いていることがわかる。

また、中学2年では、「仲間との連帯感が得られるのがよい」と「信頼できる人は誰だかよくわかる」が他の学年と比較して多くなっている。これはこの時期が特に「自分くずし」と「自分づくり」の作用が激しく、仲間の中での衝突や連帯が繰り返されている表れではないかと考えられる。なお、「日常より親密につき合えるのがよい」とする項目を選択する比率が少ないのは、宿泊を伴わない活動の性格であると考えられる。

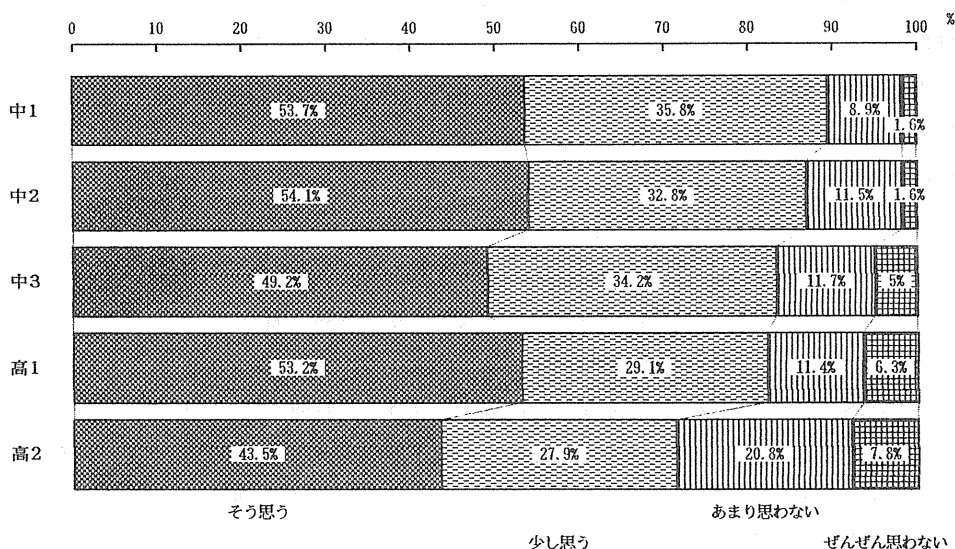
#### (5) 学校文化と人格の形成

ここでは本校でしばしば使われる「自由闊達」という言葉を用いて学校文化と学校行事の関係を考えてみた。

##### ①校外学習と校風の関係

全体からみると、「校外学習は学校の校風（いわゆる自由闊達など）を学ぼうと役立っていると思いますか」という質問で、「そう思う」とする生徒は高校2年以外で約50%も存在し、「少し思う」とする生徒を加えると各学年とも70%～90%程度の生徒が校外学習において校風を学びとっているとしている。

図. 13学校文化と校外学習



## ②校外学習において校風を感じるころ

それでは次に、学校の校風をどのようなところで感じるのかを質問した。これは「校外学習は学校の校風を学ぶうえで役立っていると思いますか」という質問に「そう思う」「少し思う」と答えた生徒を対象にして、以下の項目から2つを選択させた。

- 1 - 「企画に自分たちの意見が反映される」,
- 2 - 「みんなで話し合いながら進めることができる」,
- 3 - 「教師が生徒の自主性を尊重してくれるところ」,
- 4 - 「学校での規則があまりないところ」,
- 5 - 「時間にゆとりがあるところ」,
- 6 - 「企画内容のレベルが高いところ」,
- 7 - 「その他」

結果では、中高ともに「企画に自分たちの意見が反映される」「教師が生徒の自主性を尊重してくれるところ」「みんなで話し合いながら進めるところ」を選択する生徒が多いことが示されている。

これは、自分たちが考えた意見を自由に発表し、クラスや班の中でそれを受け止められて議論され、実現・実行していく機会や場がある。そしてこれらの生徒の活動を教師は尊重して自主性を育てているという関係になるが、このようにとらえている生徒はどれくらい存在するのかというと、図13より「そう思う」「少し思う」とした生徒が全体の約70%~90%にあたり、その中で上記3つの項目を選択した生徒は約60%~75%存在することより、全生徒における上記3つの選

択者の割合は約42%～68%になると考えられる。

いうまでもなく、学校行事は行事が行われるその日だけが活動日ではない。むしろ行事の日を含めてそこに至る過程こそが、生徒にとって意味のある教育活動であり、「自分くずし」や「自分づくり」のための時間でもある。

第2・4土休のために、学級会やHR時間が削減され、十分な時間が確保されなくなっているのが現状であるが、上記3つの選択者を増やす努力は今後さらに求められているといえよう。

図14. 校外学習において校風を感じるところ

